

技術者教育の視点

大橋秀雄

健康を維持し生命を全うするために、我々は健康のプロ—医師—を必要としている。しかし健康に恵まれて過ごす人生の大部分では、人工物に囲まれた現代社会の中であって、自らの命や安全を人工物の信頼性に委ねている。高層ビルに入れば、否応なしに設計地震までは壊れないはずの躯体に命を任せることになる。現代人は、近代社会が提供する豊かで快適な生活と引き替えに、自分の命を技術者が設定する人工物の安全性・信頼性に賭けている。技術は創造であって科学を超えている。それだけに技術者の責任は重大である。

健康のプロが医師であるように、人工物のプロは技術者である。技術者は、組織の壁を超えてユーザー—社会—を感知し、それにプロとしての責任を果たす強い意識を持たねばならない。技術者が医者並の社会的認知を得るためには、資格制度やその基盤となる教育を、それに相応しい形に整備しなければならない。

\*\*\*\*\*

我が国には不思議な潜在意識がある。学問は崇高であり、学の高い人が尊ばれる。一方高度な業（わざ）を身に付けて「なりわい」を誠実に果たす人は、重宝がられても尊敬されない。これを「学尊業卑」と呼ぶ。

学尊業卑の潜在意識が、初等教育から高等教育までこれまでの教育全体を大きく偏向させてきた。いまグローバル化の奔流の中で、我が国の異質性の根元を探るとき、筆者は先ずこの潜在意識を白日の下にさらけ出して、それがもたらす社会の膠着を糾弾したいと考えている。

これまでわが国の発展と繁栄の基盤となってきた日本的システム、換言すれば組織基盤型社会は次第に崩壊しつつある。代わって個人個人の能力、それもプロとしての専門性に裏付けられた能力を基盤とする社会に変わろうとしている。多様な職種のプロたちが、専門性と倫理感に裏付けられてそれぞれの責任を果たしてゆけば、安定して信頼できる社会が築かれるはずである。またそのプロたちが、世界標準を満たす能力に裏付けられていれば、我々は21世紀の潮流であるグローバル化にも容易に対応してゆくことができる。このような社会への変革を推し進めるとき、学尊業卑の障壁を乗り越えることが第一の関門である。

\*\*\*\*\*

工学教育とは、工学という学問を教える教育である。Engineering Educationとは、Engineerが行う業（技術業）に必要な能力を付与する教育である。前者は学、後者は業の教育である。我々は学尊業卑の前提のもとに、工学教育=Engineering Educationと勝手に読み替えてきたが、国際整合性が問われる今日、それは許されなくなってきた。昨年11月に設立された日本技術者教育認定機構(JABEE)は、工学（強いて訳せばengineering science）教育は技術者教育の一部であるとの認識に立ち、世界標準に適合する教育を早急に実現するミッションをもって設立された。

JABEEによって認定される技術者教育は、社会が認知する技術者資格—技術士—へ至る標準的な出発点と位置付けられ、基礎高等教育>実地経験>技術士取得>継続専門教育をセットとする技術者生涯キャリアーの樹立を目指している。